

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01067

研究課題名（和文）陸と海から見たアメリカ独立革命とアボリショニズムの統合的研究

研究課題名（英文）The Integrated Study of the American Revolution and Abolitionism, seen from the Land and the Sea

研究代表者

肥後本 芳男（Higomoto, Yoshio）

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：00247793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、アメリカ独立革命後の大西洋をまたいだ人、モノ、情報の移動が、奴隷貿易廃止及び奴隷制廃止運動の台頭とアボリショニストのネットワークの形成にいかなる影響を及ぼしたのかを追究した。第一に、19世紀初頭の大西洋世界での急速な奴隷制廃止運動の広がりとその政治文化的インパクト、さらに自由と平等、人種とジェンダーに関する新たな政治言説の創出過程と相克について分析した。第二に、アンテベラム期に広範な信仰復興運動と急激な領土の膨張を経験したアメリカ合衆国においてアボリショニズムが1830年代から40年代にかけて西部領域にどのように浸透し、いかなる社会的緊張・対立を引き起こしたのかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、英仏の2つの大革命が大西洋世界における奴隷制廃止運動の台頭を促したこと、さらに人種とジェンダーの伝統的な壁を打ち破る言説を生み出したことを、陸と海のアボリショニズムの視点から解明したことにある。

今日新自由主義の影響下、経済のグローバル化が進み、社会格差と人種主義が顕在化している。歴史的に見れば、人種やジェンダーを包摂する人権思想は、19世紀の奴隷制廃止運動の中で醸成されてきた。革命後も奴隷制を内包した合衆国におけるアボリショニズムの広がりや政治文化の変容を検討することは、南北戦争の遠因のみならず、今日の根強い人種主義とアメリカの分断状況を考える上で大きな意義を持つ。

研究成果の概要（英文）： This research project studied the growth of transatlantic abolitionist networks and their impact on the political culture following the American Revolution. The project analyzed two main aspects of the abolitionist movement in the United States. Firstly, it analyzed how American abolitionists played a pivotal role in developing new political ideologies related to racial and gender equality, individual liberty, and equality in the expanding American Republic. Secondly, the project delved into how transatlantic abolitionism spread to the American West, leading to social disruptions and riots. It also looked at the changing reactions to radical abolitionism in the 1830s and 1840s. Finally, this project explored the historical significance of these social disruptions and the politicization of abolitionists during the Antebellum era.

研究分野：アメリカ史

キーワード：環大西洋アボリショニズム キリスト教共和主義 第二次大覚醒運動 ウィリアム・L・ギャリソン 福音派 ラヴジョイ兄弟 アメリカ植民協会 黒人アボリショニスト

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降英米の学界では大西洋史 (Atlantic History) が隆盛し、グローバルな歴史研究に研究者の関心が急速に移行しつつあった。2005年にはハーバード大学の重鎮バーナード・ベイリンが『アトランテック・ヒストリー』を刊行し、2年後には翻訳書が出されたこともあり21世紀初頭には大西洋史を抜きにして初期アメリカ史を語ることは難しくなった。また、環大西洋史的な人やモノ・情報の相互のコミュニケーションに着目したマクロな研究が蓄積される一方で、従来の社会史アプローチを駆使した地方コミュニティや政治文化の変容過程に焦点を当てる精緻な実証研究はやや後退する感があった。

報告者は、近年独立革命後に急速に台頭したアボリショニズムが新共和国の政治文化や社会に与えたインパクトについて追究してきた。2015年春にJ.R. Oldfieldの著作 *Transatlantic Abolitionism in the Age of Revolution* (Cambridge University Press, 2013)を入手し、その広い射程と環大西洋史のアプローチに感銘を受けた。しかし、この著作は主にイギリスのアボリショニストの視点から書かれていること、また分析が1820年で終わっていることなど、アメリカ史研究の分野ではまだ課題が残されていた。

こうした状況下で、19世紀初頭のアメリカ合衆国におけるアボリショニズムの台頭に焦点を当てつつ、アトランテック史とアメリカ国内の政治文化史や社会史をうまく架橋することができるならば、環大西洋アボリショニズムのより深い理解に加えて、アンテベラム期アメリカの新たな歴史像の構築につながるのではないかと考え、本研究課題を構想し研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究課題は、奴隷制廃止運動を一国史の中でとらえるのではなく、18世紀末の大西洋を隔てた2つの大革命を経てコスモポリタニズムが高揚する中で、急速に台頭した環大西洋アボリショニズム(奴隷貿易と奴隷制廃止を希求する思想・運動)の生成過程とその政治文化的なインパクトを解明することを目的とする。具体的にいえば、第1に、大西洋世界におけるアボリショニストの人的ネットワークの構築、奴隷制に関する知識や情報の交換、奴隷制廃止運動の戦略の伝播などを考察することで、環大西洋アボリショニズムがアメリカの奴隷制廃止運動に及ぼした影響やセクション間の緊張を高めていった過程を考察する。第2に、アボリショニズム自体の急進化、つまり1830年代の即時奴隷制廃止論の台頭と西部領土へのアボリショニズムの浸透がアメリカの政治文化の変容にどのようにかわり、セクション間の分断を深めたのかを分析する。本研究は、陸と海の2つの視点から19世紀の米国のアボリショニストたちの言動とその政治文化史上の影響力を検討し、彼らの活動が果たした歴史的役割と意義を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトの遂行にあたり、国内で入手可能な二次文献やデジタル史料の収集・消化に加えて、米国でのアーカイブや歴史協会での史料調査・収集を中心に据えた。研究アプローチとしては、次の2つのアプローチを採用した。(1) 思想・人種関係史的アプローチ：独立革命が及ぼした広範囲な思想・文化的なインパクト、とりわけ環大西洋アボリショニズムの高揚をもたらした新しい人種やジェンダー観の創生と相克の分析 (2) 社会・政治文化的アプローチ：アメリカ西部の新興コミュニティへのアボリショニストの影響についての社会史的考察である。こうした海と陸からの視点を踏まえて、本研究プロジェクトは、合衆国におけるアボリショニズムの台頭が人種やジェンダーをめぐって広く大西洋世界の公共圏でどのような議論を生んだのか、さらに合衆国内の新興コミュニティの伝統的な秩序観にいかなる影響を及ぼしたのかを史料に依拠して分析した。

4. 研究成果

本研究プロジェクトでは、まず19世紀初頭の環大西洋アボリショニズム台頭の基層には18世紀以降の英米のトランスナショナルな福音主義の波及があったことを確認した。周知のように、アボリショニズムは18世紀半ばにクエーカー教徒のアンソニー・ベネゼットやジョン・ウールマンを中心にフィラデルフィアのクエーカー教会に先導されて始まり、アメリカとフランスの革命後ヨーロッパに伝播した思想である。18世紀後半に欧米で急速に広がった啓蒙思想と人道主義の思潮の中でもアボリショニズムは特に重要な位置を占めるようになった。

歴史家ジョン・オールドフィールドやフランソワ・ファーステンバーグが例証しているように、19世紀初頭には大西洋世界における白人アボリショニストの人的なネットワークが形成されていく。しかし、広く民衆のあいだに他者への共感を喚起し、「非人道的な」奴隷貿易の廃止および奴隷制撤廃を要求する草の根的な社会運動をもたらしたのは、革命・建国期に共和主義と結びついた福音主義的なキリスト教 (Christian Republicanism) の影響が強かった。近年の研究で

は、奴隷制廃止運動への黒人アボリショニストの積極的な貢献が強調される傾向にある。この点に関して、報告者はすでに、「黒人船長ポール・カフィ アボリショニズムと環大西洋商業ネットワーク」(田中きく代他『海のリテラシー 北大西洋海域の「海民」の世界史』(創元社、2016年)、「建国期フィラデルフィアにおける印刷文化、人種、公共空間」と、遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民 - デモクラシーの政治文化史』(東大出版会、2017年)の2本の論文を刊行している。このような研究を踏まえて、本研究プロジェクトではもっぱら19世紀初頭のアボリショニズムの台頭と暴力について分析を進めてきた。これに関しては、「「狂暴の30年代」と急進的アボリショニズム」(同志社大学アメリカ研究所第1部門研究会(2022年7月26日、於同志社大学)、「19世紀の急進的アボリショニズムの台頭と暴力 - ポピュリズム史研究の視点から」(関西アメリカ史研究会年次大会(2022年11月13日、於同志社大学)において研究報告を行った。これらの報告の成果の一部は、2024年3月に出版された『アメリカ史 - 世界史の中で考える』(放送大学出版会、2024年)の中に反映されている。

先述したように、キリスト教共和主義は当時の社会改良運動の文化的、精神的基層となったばかりか、黒人指導者にも少なからぬ影響を及ぼした。自由黒人の指導者の中には「独立宣言」の言説に感化されて白人と平等な市民権を主張する者が現れた。同時に、この頃にはアメリカ社会では反権威主義的なポピュリズムが席卷するようになる。福音主義的な個人の意思による救済が叫ばれるようになる中、効果の疑わしい正規医学に異を唱えたトムソニアン主義者、水治療や菜食主義などを通して健康改善運動に参加する者が増加したが、彼らの多くが奴隷制廃止運動の支持者であったことが分かっている。合衆国のポピュリズムとの関係について、日本アメリカ史学会第20回年次大会において報告者は、「アンテベラム期のトムソン療法の台頭と医療ポピュリズム」(2023年9月16日、於北海学園大学)と題する研究報告を行った。19世紀ポピュリズム史研究会によって学術書として刊行が計画されている論文集に、その報告原稿を新たに加筆・修正したうえで、論文を寄稿する予定である。

本研究では、従来の主要な白人アボリショニストの視点のみならず黒人アボリショニストの言動も注視し、いわば「下からの歴史」による統合的なアボリショニズムの理解を目指した。ウィリアム・L・ギャリソンの著名なアボリショニスト系新聞『リベレーター』だけでなく、他の様々なアボリショニスト系新聞や宗教トラクト、反奴隷制協会の出版物の影響力について雑誌のサブスクリプション方式や取次代理人制度の構築過程などについて今一度踏み込んだ分析が必要である。草の根的な社会運動の一環として西部へのアボリショニズムの浸透とコミュニティ内の相克を捉えること、北米での第二次大覚醒運動の広がりとおアボリショニズムの高揚が密接な平行な関係にあることが判明するとともに、地方コミュニティに根差した伝統的な法秩序が1840年代に人権に基づく普遍的市民権を主張する急進的アボリショニストの言動によって大きな変革を迫られたことを突き止めた。この研究成果について近々に論文で刊行する予定である。

海から見たアメリカ革命がもたらしたインパクトについて、新興国アメリカの関心が太平洋海域へ移行した経緯について論考する次の3点の論文を寄稿した。「21世紀初めの「建国の父祖ブーム」とアメリカ革命史研究の軌跡」(伊藤、中野、肥後本編著『アメリカ研究の現在地 - 危機と再生』(彩流社、2023年)、「アメリカの広東貿易の開始とアストリア砦 - 太平洋北西沿岸部の領有権をめぐる帝国抗争」(田中、遠藤、金澤、中野、肥後本編著『海のグローバル・サーキュレーション 海民がつなぐ近代世界』(関西学院大学出版会、2023年) Yoshio Higomoto, "The Imaginative Power of Travel Journals and the Fur Trade in the Early American Republic," A Special Supplementary Issue to *Doshisha American Studies*, 23 (March 2024) アメリカ革命の思想的な影響力は大西洋世界だけでなく太平洋海域にも及んだが、綿花プランテーションに適さなかった北米西海岸には奴隷制は根づくことはなかったものの、北米西海岸ではアフリカ系住民への人種主義がアジア系移民に向けられることになる。

今後の研究課題としては、本研究期間開始からほどなくして世界各地でコロナ禍が起こり、史料の实地調査が2年間ほど不可能になったこともあり、いくつかの諸課題が未消化である。第1に、社会史的な視点から、環大西洋アボリショニズムと19世紀初頭の福音派教会の拡大、とりわけ第二次大覚醒運動の中核をなした改革長老派、バプテストやメソジスト派などの福音派の西部領土への浸透とおアボリショニズム拡大の相互関係についてさらに深く掘り下げたい。歴史家マーク・A・ノルが指摘しているように、同じ福音主義を信奉しつつも、セクションに沿って分裂した宗教諸派のあいだの相違、つまり奴隷制を批判する宗教グループとそれを受容するグループを分けた要因をそれぞれの宗教観やコスモロジーを比較検討する作業が必要である。

第2に、南北戦争を引き起こした原因としてアボリショニストの行動主義がどの程度の役割を果たしたのかを再検討する余地がある。この論点は、南北戦争要因をめぐる史学史上の大きな争点の一つであり、これまで歴史家のあいだで南北戦争の要因をめぐる様々な諸説が提出されてきているが、いまだ解釈の合意を得ていない。近年ではマニーシャ・シンハ(Manisha Sinha)が奴隷制廃止運動における黒人のアボリショニストの役割に着目し、アメリカ民主主義の進展においてアボリショニズムの急進性を高く評価する大著を刊行した。しかし、アンテベラム期に「狂信者集団」とみなされてきた急進的アボリショニストの影響力をシンハはやや過大に評価しすぎているのではないかという批判もある。歴史的文脈の中に今一度アボリショニストの言動を位置づけると同時に、19世紀アメリカの領土膨張や経済の変化などを踏まえたうえで、より包括的なアンテベラム期のアメリカ史像の再構築が求められる。

第3に、「新経済史」を標榜する研究者から近年奴隷制こそが、資本主義発展の原動力であったとみる解釈が提出されている。これは近年のグローバル資本主義批判の一環であるが、この見方を敷衍すれば、いち早く奴隷制を非難したアポリシヨニストは冷酷な資本主義の批判者であり、ユートピア的社會主義、フェミニズム、平和主義、先住民の権利擁護の先駆者とされる。しかし、こうした見方の妥当性は、今一度19世紀史の文脈の中で検討される必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yoshio Higomoto	4. 巻 23
2. 論文標題 The Imagination Power of Travel Journals and the Fur Trade in the Early American Republic	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Doshisha American Studies, A Special Supplementary Issue 23	6. 最初と最後の頁 27-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 肥後本芳男
2. 発表標題 アンテベラム期のトムソン療法の台頭と医療ポピュリズム
3. 学会等名 日本アメリカ史学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 肥後本芳男
2. 発表標題 19世紀の急進的アポリシヨニズムの台頭と暴力ポピュリズム史研究の視点から
3. 学会等名 関西アメリカ史研究会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 肥後本芳男
2. 発表標題 航海記の出版ブームと新生アメリカの北西部開拓
3. 学会等名 日本西洋史学会70周年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 肥後本芳男
2. 発表標題 ジェファソン研究の変遷と文化戦争
3. 学会等名 中・四国アメリカ学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 伊藤 詔子、中野 博文、肥後本 芳男	4. 発行年 2023年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 388
3. 書名 アメリカ研究の現在地	

1. 著者名 田中きく代、遠藤泰生、金澤周作、中野博文、肥後本芳男	4. 発行年 2023年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 440
3. 書名 海のグローバル・サーキュレーション	

1. 著者名 小野沢透、肥後本芳男	4. 発行年 2024年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 349
3. 書名 アメリカ史：世界史の中で考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

肥後本芳男、「ジャクソン期アメリカ西部へのアボリショニズムの浸透と暴力」, 同志社大学アメリカ研究所第1部門研究会, 於同志社大学 2021年7月24日
 Yoshio Higomoto, "Astor's Global Emporium and the U.S. Claim to the Pacific Northwest in the Early Republic" History Department Colloquium with collaboration of Jackson School International Studies, University of Washington, November 21, 2021
 肥後本芳男、「19世紀メディカル・ポピュリズムの盛衰」, 19世紀ポピュリズム史研究会例, , オンライン報, , 2021年12月18日
 肥後本芳男、「凶暴の30年代」と急進的アボリショニズム」, 同志社大学アメリカ研究所第1部門研究会, 於同志社大学 2022年7月26日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------